

中央大学「舞鶴引揚記念館 特別展」開催にあたって

舞鶴市は、京都府北部の日本海に面しており、リアス式の海岸線が美しく古くから海と共に栄えてきました。また明治 34 年に海軍鎮守府が設置され、第 2 次世界大戦終結後の昭和 20 (1945) 年には引揚港に指定され 13 年間に渡り約 66 万人の引揚者を迎えるなど、日本の近現代史に大きな役割を担ったまちであります。

特に 4 6 万人ものシベリア抑留を体験した方々が帰還され、昭和 2 5 年以降は、唯一の引揚港として、日本人の引き揚げの記憶を象徴する港となりました。

当時、戦後の混乱の中、自分の生活もままならない状況において舞鶴市民は、筆舌に尽くしがたい体験の末、心身ともに疲れ切って日本に戻ってこられた引揚者を心づくしの歓迎でお迎えした歴史があります。

体験者の方からは、今もなお、引揚港舞鶴への想いを寄せていただく方もあり、市民の心にも、引揚の記憶はずっと引き継がれております。

昭和 63 年には、引揚体験者の熱望により「舞鶴引揚記念館」を開館し、引き揚げの史実を後世に伝え、平和の尊さを広く発信する拠点として 1 万 6 千点の資料を活用しながら歩みを進めております。

所蔵資料は、抑留中に記録された日記やメモ帳類、また命をつないだ手作りのスプーンや食器、衣類、そして安否を気遣う留守家族の状況を伝えるはがき、引き揚げ事業に関わるものなど多岐にわたっており、歴史だけでなく、人間愛、家族愛、平和への願い、人間の生命力など人類に共通する普遍的な主題をも包含しており、世界的な重要性、真正性、希少性、唯一性を有する記録資料として、平成 27 (2015) 年には、ユネスコ世界記憶遺産に認定されております。登録に際しましては、中央大学の佐藤元英教授をはじめ諸先生方に資料調査から貴重な助言にいたるご支援を賜りましたこと、改めて感謝申し上げる次第であります。

今、戦後 74 年の歳月を経て、戦争を知らない世代が人口の大半を占めつつあるなか、戦争や引き揚げの歴史は徐々に風化しつつあります。しかし、歴史を過去の出来事とするのではなく、未来に生かしていくことが必要と考えております

そのような中で、今回、次の世代を担う優秀な若者が集い学ぶ大学で、本市の取り組みの発表や所蔵資料の展示の機会をいただけたことは、誠に意義深いものと考え、機会の創出にご尽力いただいた中央大学関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

期間中、多くの学生の皆様方に訪れていただき関心と共に平和の祈りが未来へと継承されることを願っております。



令和元年 10 月

舞鶴市長 多々見良三